対立概念の補完による建築的中間の展開

Presence of the Architectural Elements that Complement Contradictions

東京工業大学　小泉知碩

保存：研究

対比的対立

隠蔽性⇄透明性

C 位相をずらす

研究棟のファサードは内部の機能に応じて部分的に書庫棟のスレートが連続し、外観全体に統一感を与え、階ごとのメリハリを生みだす。

保存：管理

対比的対立

隠蔽性⇄透明性

A 途中の性格

C 位相をずらす

異素材かつ同一寸法 250mm×1000mm のスレートとガラスをファサードに散りばめ、遠景ではグラデーション、近景ではランダムさで中間をつくる。

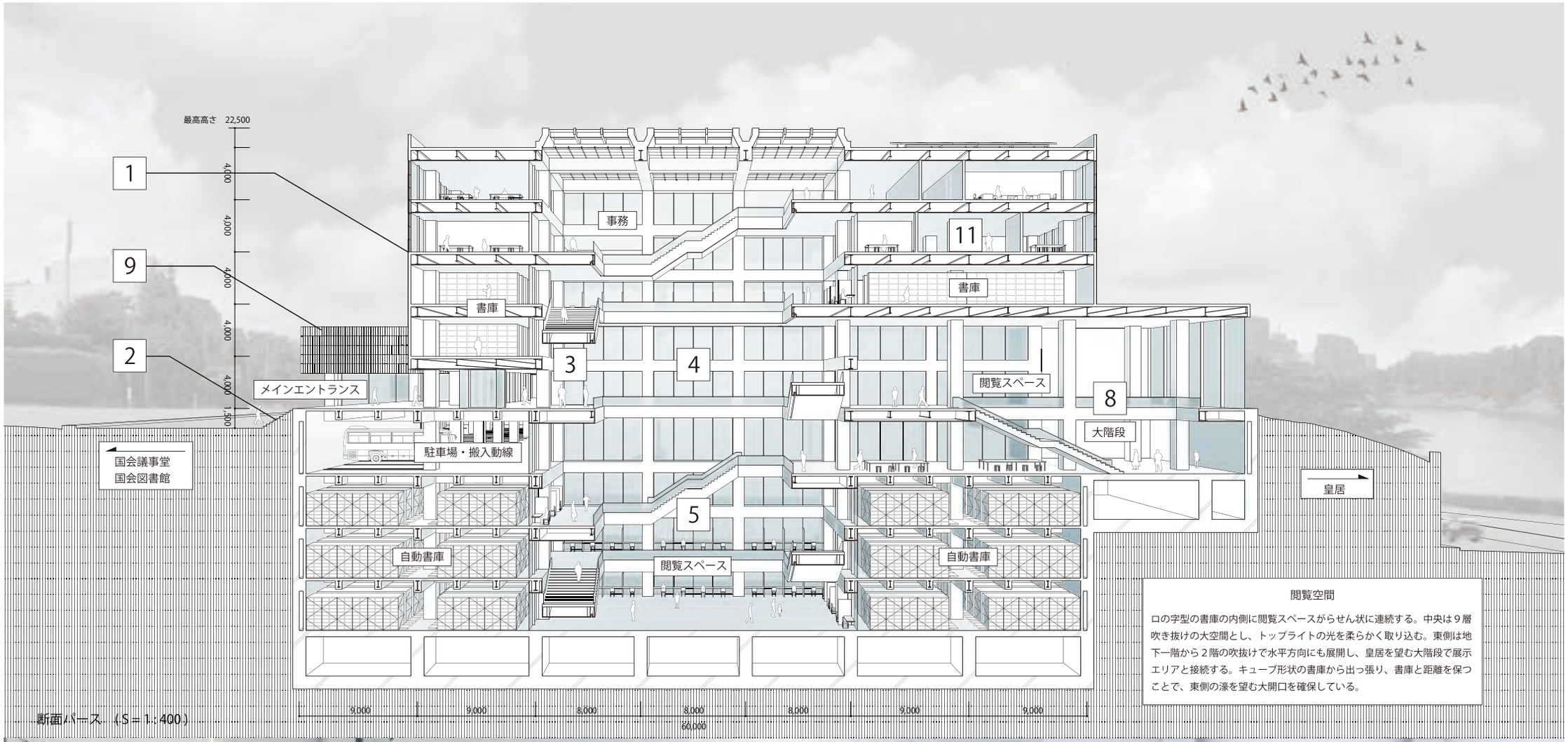
建築：自然

慣用的対立

扁平⇄粗性

C 位相をずらす

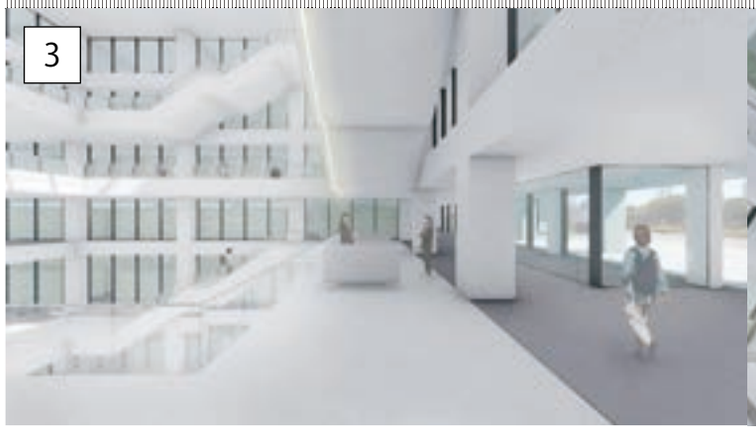
書庫棟よりも少し大きく質感の粗いスレートをファサードに用い、南側の庭園との間に位置する展示部は自然の粗性を取り入れる。



断面パース（S＝1：400）

閲覧空間

ロの字型の書庫の内側に閲覧スペースがらせん状に連続する。中央は９層吹き抜けの大空間とし、トップライトの光を柔らかく取り込む。東側は地下一階から２階の吹抜けで水平方向にも展開し、皇居を望む大階段で展示エリアと接続する。キューブ形状の書庫から出っ張り、書庫と距離を保つことで、東側の濠を望む大開口を確保している。



吹抜け：エントランス

対比的対立

巨大性⇄狭小性

A 途中の性格

１階正面エントランスと吹抜けの境界では、吹抜けを取り巻く階段が上部にくることで、天井高が段階的に高くなりつつ吹抜けの大空間へ接続する。

閲覧：保存

対比的対立

平坦性⇄階層性

D 位相の反転

積層する書庫と平坦に展開する閲覧空間という一般的な位相を反転し、閲覧空間に垂直方向の階層性をもたせることで書庫との関係性をつくる。

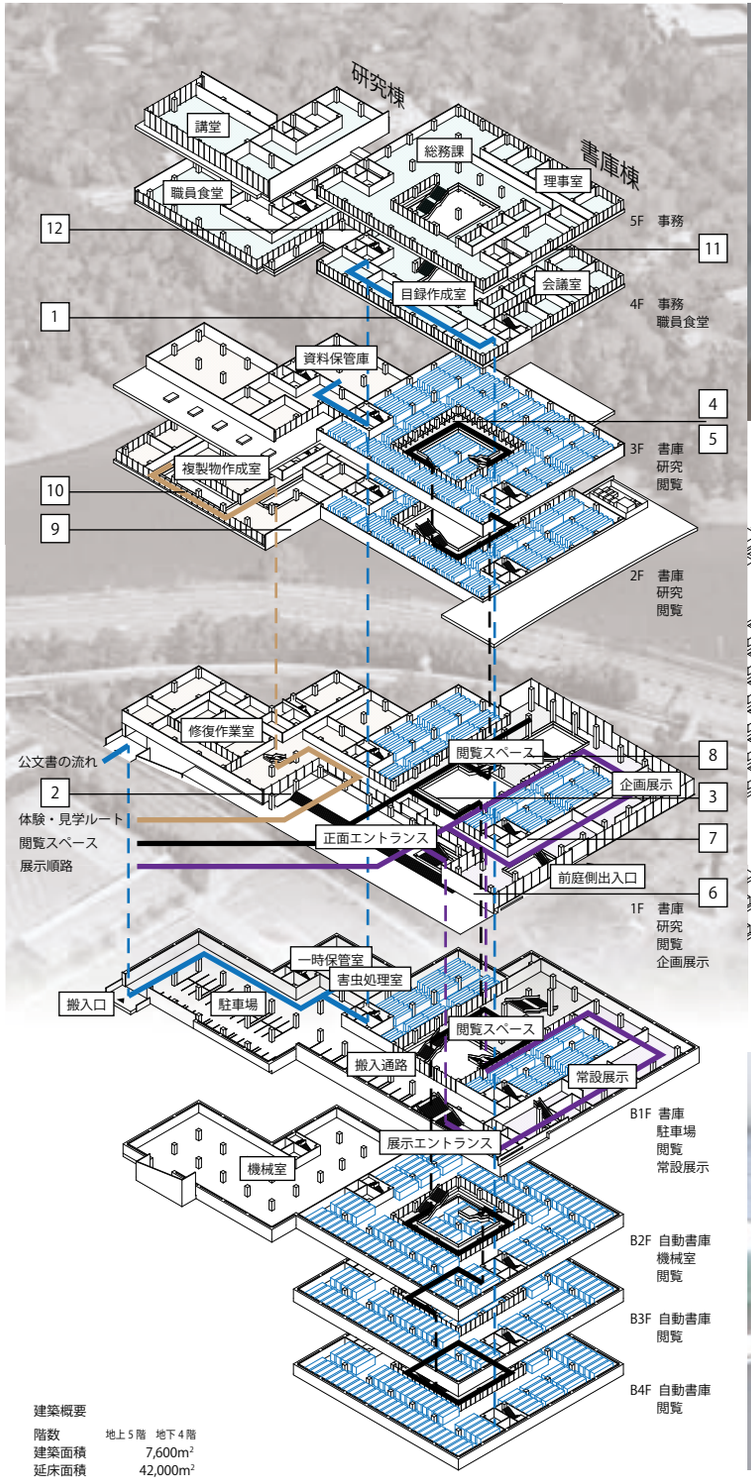
階段：家具

対比的対立

部分⇄全体

A 途中の性格

閲覧空間と展示の結節点にある大階段は、建築の部分としての動線要素でありながら観客席や皇居を望む居場所となり、家具としての全体性を帯びる。



建築概要

階数	地上５階　地下４階
建築面積	7,600m²
延床面積	42,000m²
書庫部分	17,000m²

展開アイソノメトリック図　(S =1/1200)

2

内部：外部　相補的対立

階層性⇄平坦性　C 位相をずらす

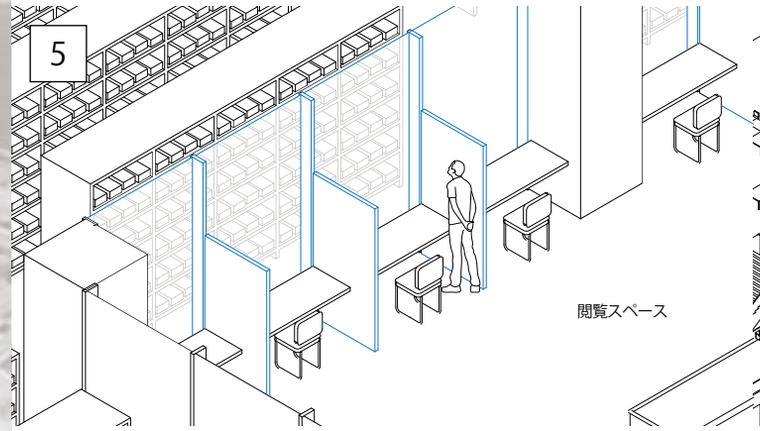
空間が分割され積みあがる階層性をもった内部空間に入る手前のアプローチにレベル差をつくることで、ファサードに格調をもたせる。階段の位置は地下に納まる書庫と対応する。

10

見学：業務　慣用的対立

包容性⇄排他性　B 第三の指標

トップライトが照らす吹抜けを介して修復作業室や複製物作業室が立体的に見える展示ルート。職員動線とは分離し、距離を設けることで業務を妨げない。

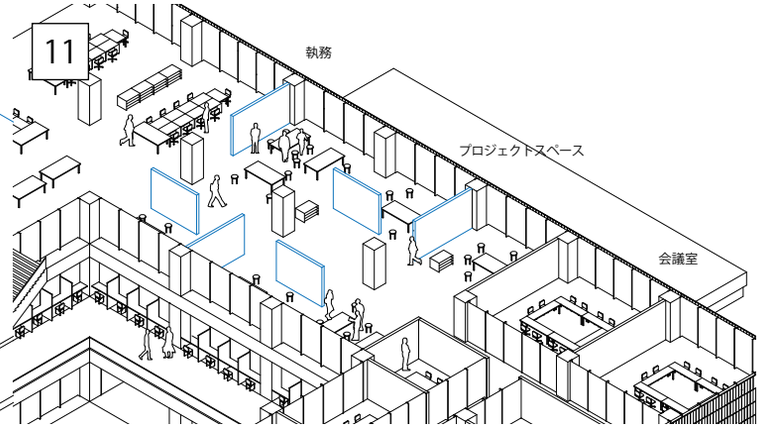


5

閲覧：保存　対比的対立

透明性⇄隠蔽性　D 位相の反転

書庫棟をロの字の構成とすることで、文書が日射の影響を受けることなく、吹抜けに配した閲覧スペースとの境界に透明性を獲得することができる。



11

長時間：短時間　段階的対立

開放性⇄閉鎖性　A 途中の性格

一般的な固定席の執務空間と短時間利用の閉鎖的な会議室の間に、シーズン単位での利用を想定した開放的なプロジェクトスペースを置く。

7

内部：外部　相補的対立

純粋⇄装飾　D 位相の反転

書庫棟の外装が展示エリアの内部まで連続し、国会前庭に面する展示部南側はガラスファサードとすることで、展示部においてマテリアルの反転の状況をつくっている。

12

休憩：業務　相補的対立

意匠性⇄機能性　B 第三の指標

執務空間から職員食堂への連絡通路では、タイルカーペットとフローリングの内装材の間に、第三の要素としてエクステリアの仕上げを用いる。

反義語の分類

標準的反義語

ⅰ）相補的（complementaries）
一方の否定が他方の肯定の関係になる対立
男性 - 女性　出席 - 欠席　等しい - 異なる

ⅱ）段階的（antonyms）
連続した尺度に基づく境界線のない対立
長い - 短い　古い - 新しい　深い - 浅い

ⅲ）方向的（directional opposition）
ある種の方向性に関連する対立
行く - 来る　上 - 下　昇る - 落ちる

周辺的反義語

ⅳ）慣用的（accidental opposition）
対照的な意味として捉えられる対立
戦争 - 平和　紅 - 白　先生 - 生徒

ⅴ）対比的（multiple incompatibility）
関連語として複数まとまり対比される対立
白 - 黒　赤 - 青　赤 - 白

有標理論

A（常態）　-　non-A（非常態）
無標形　有標形

健康 - 不健康　日本人 - 外国人　など

二項対立と脱構築

パロール
（話し言葉）
真理
本質
現前性

エクリチュール
（書き言葉）
解釈され誤解を生む
非本質
再現前

脱構築とは、この階層秩序的二項対立を
その決定不可能性から崩すこと

脱構築の手法

1．対立項の優劣を疑い、逆転の論理を考える
2．対立項が相互依存し、留保された状態をつくる
3．対立項の決定不可能性を担う第三の概念を用いる
「パルマコン」

建築的中間の生成プロセス

適用させる対立概念

①言語学的な分類

相補的対立　段階的対立　方向的対立　慣用的対立　対比的対立

②対立指標の選択

（構造・材料）
扁平平坦 ⇄ 凸凹粗性
色 ⇄ 白
透明性 ⇄ 隠蔽性
剛性 ⇄ 軟性

（環境）
閉鎖性 ⇄ 開放性
暖 ⇄ 寒
明 ⇄ 暗
騒 ⇄ 静

（計画）
階層性 ⇄ 平坦性
全体性 ⇄ 部分性
排他性 ⇄ 包容性
独立性 ⇄ 協調性

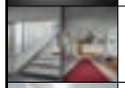
（意匠）
水平垂直 ⇄ 曲線斜線
巨大性 ⇄ 狭小性
純粋 ⇄ 装飾
対称性 ⇄ 非対称性

（歴史）
古 ⇄ 新
不変性 ⇄ 更新性

③対立概念の補完

A　B　C　D

位相の途中の性格を持たせる
第三の指標を介入させる
複数の対立指標の位相をずらす
複数の対立指標のうちいくつかを反転する

事例		対立概念 / 対立指標	手法
	神奈川県立近代美術館 坂倉準三 1951 神奈川 , 日本	建築：自然 慣用的対立	C
		静 ⇄ 動	
	Montessori School Herman Hertzberger 1960 Delft, Netherlands	内部：外部 相補的対立	A
		閉鎖性 ⇄ 開放性	
	Fire Station No.4 Robert Venturi 1968 Columbus,USA	正面：側面 対比的対立	C
		白 ⇄ 色	
	中野本町の家 伊東豊雄 1976 東京 , 日本	専有：共有 相補的対立	B
		室化 ⇄ 非室化 ／湾曲部＼	
	Kunsthal OMA 1992 Rotterdam, Netherlands	スラブ：縦動線 慣用的対立	D
		水平 ⇄ 傾斜	
	House N 藤本壮介 2008 大分 , 日本	内部：外部 相補的対立	C
		閉鎖性 ⇄ 開放性	

対立概念の補完による建築的中間

近年の文化施設では、参加・体験が重要視され機能の多様化が進んでいる。このような複雑・複合化する与条件において、「中間領域」という概念は相異なる場所を関係づけ、空間や機能の対立を解消する方法として現在も広く用いられている。しかし、そこで思考されるべき対立という概念は様々な階層を有し、さらにこれらは建築要素との実体的な対応が図られることで、領域における位相関係に留まらない「建築的中間」という方法論へと展開する可能性があると考える。そこで本研究では、諸分野における論考の概観を通して方法論的モデルを構築し、さらに、国民と国家の中間とも言える政府機関として歴史資料の保存と利用促進を担う諸機能の複合施設である国立公文書館の新築構想を通して、多種多様な対立関係が包摂され共存する公共建築の可能性を提示する。

新国立公文書館の構想

言語学における対立概念

反義語はその成立から標準的および周辺的の５種に分けられるとされる。また、語や文には無標 / 有標という分類も与えられ、前者は一般的、後者は特殊なものと識別される。これらの言語学的な思索は、対立概念そのものの成立を把握し、様々な事象の中での対立を認識し、構造化する手がかりとして用いることができる。

現代思想における対立概念

20 世紀後半のポスト構造主義では、ジャック・デリダによって脱構築の思想が提唱された。本質と非本質という前提となる価値観を疑うことで、二項対立を崩す批評の可能性を指摘している。本論文ではほかに、ジル・ドゥルーズによる差異、生成変化といった用語を引用しながら、対立に内在する転換や不定の可能性を示す。

国立公文書館の概要

図書館や文書館、博物館は知識や文化の記録・保存にかかる機関として歴史的に発生し発展してきた。しかし日本でのアーカイブズの歴史は浅く、現在も行政における公文書保存の重要性への理解は進んでいない。公文書の管理運用の整備不足に伴い、市民による活用の素地も十分に形成されず、国立公文書館の利用も限定的な状況である。
提案する新国立公文書館の構想では、建物の様々な機能や利用者を包摂し発展させる新たなアプローチとして、建築的中間による対立概念の補完を試みる。

公文書の流れ

行政機関等からの移管が決定し搬入された文書は、まず地下一階の害虫処理室でくん蒸と検疫処理を行う。その後、一簿冊ごとに目録を作成し、デジタルアーカイブでの検索が可能な状態にする。それらを経て公文書は配架され、永久に保存される。

建築的中間の生成プロセス

諸分野での対立概念に関する論考の概観で得た視点をもとに、対立概念の多様な構造を補完し実体化するための「建築的中間」の生成プロセスを示す。
①対象とする対立概念を言語学的分類から認識する。
②建築の諸相が具える実体的な対立指標を、反義語や標識との対応をもとに構想する。
③構想した対立指標を①の分類をもとに A~D の手法によって編成し、潜在的な性質を補完した建築的中間を得る。

建築的中間の例

このような建築的中間の存在は、部分的な適用ではあるがいくつかの建築に実践を見出すことができる。

国会前庭への移設

国立公文書館は現在、北の丸から国会前庭への移設新築計画が進行中であり、本提案でも国会前庭を敷地としている。

全体計画

公文書館の基本的な機能である保存・研究・閲覧・展示に、移管された文書の流れや体験・見学のルートを織り込む基本構成とする。

保存を担う書庫に閲覧の機能を統合した書庫棟を中央に、研究と展示のエリアを排他性 / 包容性、奥 / 手前という対立指標を用いてその両脇に配置する。さらに管理機能を書庫棟と研究棟の上部に置き、全体をまとめる構成とする。これら諸機能の各所に生じる対立を、様々なスケールや階層を備えた建築的中間を展開し補完する。

国立公文書館の現況

年間訪問者数	建築（現状）
5 万人（閲覧 4500 人） 国立国会図書館　53 万人 衆議院　61 万人 参議院　32 万人 国立近代美術館　33 万人	東京都千代田区北の丸 地上４階　地下２階 敷地面積　4,000m² 延床面積　11,700m² 書庫部分　7,000m²

関連年表

1971　国立公文書館　設置
1987　公文書館法
1999　国立公文書館法
2009　公文書管理法

現国立公文書館（北の丸）

公文書の流れ

受け入れ

くん蒸・検疫

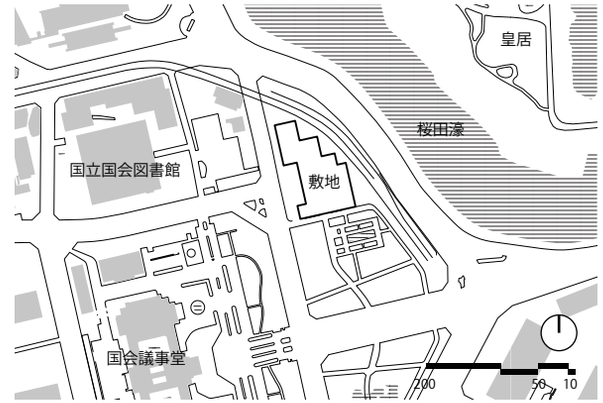
目録作成

配架

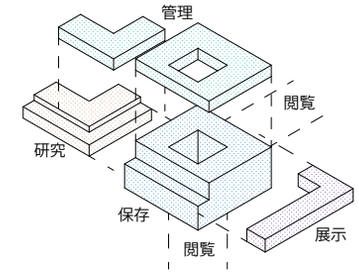
デジタル化作業

修復作業

広域配置図



公文書館の業務



研究：展示 対比的対立	保存：閲覧 対比的対立	管理：被管理 相補的対立
排他性 ⇄ 包容性	閉鎖性 ⇄ 開放性	平坦性 ⇄ 階層性
高尚 ⇄ 低俗	遮蔽性 ⇄ 透明性	更新性 ⇄ 不変性
奥 ⇄ 手前	不変性 ⇄ 更新性	狭小性 ⇄ 巨大性
上 ⇄ 下	暗 ⇄ 明	上 ⇄ 下